時評

石を売る

奥田亡羊

つげ義春に『無能の人』という漫画がある。何もできない男の物語だ。その中に食いつめた男が多摩川の河原で多摩川の河原の石を売る場面がある。通りがかりの人がそのへんの石と同じじゃないかと笑うと、男は「これが同じに見えるのか」と問い返す。何に使えるわけでもない物を売る行為に、もとより社会性も何もあろうはずがない。ましてや人にとってはどれも同じ石だ。しかし無いように見えてやはりそこには違いがある。その違いを論じて歌人たちは千年の時間を過ごしてきた。わたしにとってもまた短歌は河原で河原の石を売る営みに等しい。

さて、長く忘れていたこの漫画を思い出させてくれたのは今年十月に砂子屋書房から出版された現代短歌文庫『小見山輝歌集』だった。小見山輝は昭和五年岡山県生まれ。戦中、満蒙開拓青少年義勇軍に参加して大陸に渡り、満十五歳で引揚げを体験した。戦後、服部忠志に師事し、加藤克巳の「近代」に参加、現在は結社「龍」の代表を務めている。『小見山輝歌集』には小見山が四十九歳で出版した第一歌集『春傷歌』が全篇収録されている。かねてから読みたいと思っていた歌集だった。少年時代に体験した満州引揚げがどのように歌われているかを知りたかったのである。ところがその期待はある意味で裏切られた。この歌集に直接戦争をうたった歌は十首ほどしかない。あとはアララギの写生を基調とした日常詠ばかりだ。そしてわたしは歌と歌の間から「同じに見えるのか」とつぶやくあの男の声を聞いたのである。

・夜の峠下りきたればせせらぎは山にひびかふたぎちとなりぬ
・朝霧の動くともなき河原に現れては消ゆる黒き石ひとつ
・伴ひて振り向かざれど藪かげに椿の花の落ちて音たつ
・西日つよき畳の上の一本の抜毛を見れば動きつつあり
・つかの間のしぐれののちの雲晴れて墓原に人の墓ぞひしめく
・青草の丈なす原をつらぬきて道かたむけり海に入る道
・ほの白くどくだみの花地に咲きてまぼろしなしぬこの暗き庭

生き残った小見山にとって、山を下って日常へ戻ることは闇の深みへ降りて行くことに他ならなかったのではないか。朝霧に隠れては見える「黒き石」も何を象徴するのか、不吉である。三首目の椿の歌にも引揚げの体験が反映されていないか。「振り向かざれど」に歌人の体重がかかっているように感じる。畳に動く抜毛や墓原にひしめく墓を見る眼も尋常ではない。小見山にとって死者はまだ死んでいないのではないか。青草の原を海へと続く道は死へと誘う道であろう。どくだみの咲く庭の歌も妖しいまでの不吉さである。いずれの歌にも深い虚無が滲む。小見山はその虚無を通して戦争を歌い続けているのである。

『春傷歌』を読んであらためて思うのは、小見山の歌が「歌わない」というモチーフから出発していることだ。それがこの歌人に虚無の主題と写生の方法を選び取らせている。また小見山の歌にはエロスとタナトスを同時に感得するような、釈迢空に通じる感覚がある。どちらも現代短歌の始点を考える上で重要な意味を持つ特徴である。『春傷歌』は戦後の短歌史の流れの中で位置づけを再確認されなければならない歌集であろう。